ことばと文化の学び (5)

—植物と英語—

Language and Culture Education (5)

: Plants and English Expressions

仲 潔 †

NAKA, Kiyoshi[1]

［キーワード］ メタファー、英語学習、英語科教育

[Keyword] Metaphor, Learning English, English Language Education

［所　　属］ † 岐阜大学教育学部

[Institution] Faculty of Education, Gifu University

［要　　旨 Abstract］

本稿は、学習者の言語文化観にゆさぶりをかける英語科教育のあり方に関する筆者の一連の研究の一部である。言語文化観とは、端的に言えば言語や文化に対して抱くイメージや価値観の総称である。英語科教育では「コミュニケーション能力の育成」が重視される傾向がますます強くなっているが、偏向した言語文化観であれば情報を正確・適切に解釈することができない危うさがある。すなわち、言語文化観は言語や文化に関する情報の判断基準として機能する。言語文化観へのゆさぶりが対象とする射程範囲は広いが、本稿では英語表現の背景にある文化的なものの見方のうち、植物にまつわる表現に焦点を絞っている。植物は、私たちにとって身近な存在であり、私たちは植物に対するイメージを半ば無意識のうちに言語表現に反映している。本稿では、映画や洋楽などの日常的な娯楽に見られるさまざまなメタファー表現を取り上げ、日本語と英語の表現における異同を考察する。英語学習者の英語への興味関心を惹くことに加え、言語表現力の向上に寄与すると期待される。

1. はじめに

公教育における外国語科の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」（『中学校学習指導要領』、p.144）を育むことである。究極的には、「コミュニケーションを図る資質・能力」の育成へと繋げる必要があるのだが、その過程として「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」ることが期待されている。ここでの「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、「外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方」（『中学校学習指導要領解説 外国語編』、p.10）のことである。

これまで筆者は、社会言語学やコミュニケーション研究の成果をもとに、コミュニケーション活動を主体として学習者の興味関心を惹きつつ、コミュニケーション能力を育成する指導のあり方を模索してきた（仲 2011, 2022 など）。同時に、多くの学習者にとっての母語である日本語と学習対象の言語である英語との「ものの見方・捉え方」の異同についても、関心を抱いてきた（2013, 2020 など）。本稿では、主として英語科教育に携わる者が有していることで、授業実践のあり方の幅を広げ、学習者の興味関心を喚起しうる知識、すなわち日本語と英語との「見方・考え方」の異同について論じていく。もちろんそれ自体は膨大な知識の蓄積が既にあり、本小論で扱うにはあまりにも紙面が足りない。本稿では、私たちにとって身近な存在である「植物」に着眼し、それにまつわるさまざまな言語表現を取り上げたい。

学習者の学習スタイルは多様である。コミュニケーション活動に積極的に従事することのできる者もいれば、そうではない者もいる（仲 2009）。本稿で取り上げる内容は、このような多様な学習者が、英語やその背景にある文化について興味・関心を抱く契機をもたらし得る(1)。あるいは、英語学習に励んでいる学習者にとっても、新たな英語の見方をもたらされたり、表現力を豊かにしたりする可能性もあろう。つまり、本稿は認知言語学やメタファー研究を本格的に扱うものではなく、言語表現の豊かさやその背後にある文化的な視点を契機として、英語学習の動機づけにつながることを目的としている。次節では、本稿における基本的な立脚点を確認する。続く第 3 節では、「植物」の分類に基づいて英語表現をいくつか取り上げる。第 4 節では、個別の野菜・果物からいくつかを取り上げ、それを用いた言語表現を紹介する。

2. 分析の視座

植物にまつわる日英語の表現を取り上げる前に、本稿の基本的な立場を確認しておく。

2. 1. “plant”の原義

一般的に、生物を大雑把に分類すれば動物と植物とに分けられる。このような二界説（植物界、動物界）は伝統的なものであり、五界説（モネラ界、原生生物界、植物界、菌界、動物界）をはじめいくつかの分類法がある。とはいえ、現時点で一般的に受け入れられているのは、動物と植物という分類であろう。本稿ではそのうち、植物に焦点を置いて、そのイメージとそれが表出された言語表現（日英語）との関係を見る。

エヴァンス（2021）による言語使用説やトマセロら（Tomasello, 2008；Ibbotson and Tomasello, 2016）による用法基盤モデルは、チョムスキーやピンカー（Pinker, 2003）らのように、言語を本能として生得的に脳内に存在すると捉える立場とは異なる。実際に言語を運用する中で創出されたり（エヴァンス 2021: 5）、観察を通じて習得されたりするものであり（トマセロ）、共同体や世代間において継承されるものであると捉えている。つまり、私たちが他者と言語を用いてコミュニケーションを図ることができるのは、生後からの社会化／文化化の中で他者の言語使用を観察し、実践を通して身につけるためである、とする立場である。筆者はこれらの言語に対する捉え方（言語観）のいずれかを「真」とし他方を「偽」とする意図はなく、多様な言語観を持つことの重要性を主張する立場をとっている。つまり、認知言語学や社会言語学、言語文化学、さらには心理言語学などの統合的理解を目指すのではなく、包括的な理解を通して言語現象を多角的に解明することに強い関心を抱いてきた。本稿では、そのうち認知言語学ないしは言語文化学的な立場から、植物にまつわる言語表現（主としてメタファー）の考察を通して、私たちの日常に潜んだ言語観の一端を見ようと思う。

さて、植物は英語では“plant”であるが、名詞として「植物」のほか、「（大地に設置する）設備や工場」という意味を持つ。動詞として使えば、「（苗などを）植える」だけではなく、「（思想を）植え付ける」、さらには「（爆弾などを）仕掛ける」のような意味を持つ。これらは「植物」が大地に根を生やし、息づいているというイメージから生まれる一種のメタファー（比喩表現）である。こうしたメタファーは日常に溶け込んでおり、意識することなく用いている。

2.2 メタファー：私たちは主観的／経験的な価値判断で言語生活を送っている

X（旧 Twitter）などの SNS の普及により、「炎上」という言葉を見たり聞いたりすることが増えた。炎上は文字通りには、何かが燃えて火が高く上がる現象である。いわゆるメタファーは、異なる 2 つのものに類似性を見出し言語化することである。SNS における「炎上」もメタファーの 1 つである。

ここで問題にしたいのは、類似性を見出すイメージの源が、別に科学的見地や分類に基づいたものではなく、私たちの生活における経験的・主観的なイメージから形成されがちであることである。例えば、いちご・レモン・すいか・バナナ・メロンの中から「果物」はどれか、と尋ねられたとしよう。生物学的に見ればレモンだけが果物なのだが、おそらく多くのものにとってはむしろレモン以外を果物とみなすのではないだろうか。バナナは「木」になっているように見えるが、木ではなく「茎」にできている。そのため果物ではなく野菜である。もちろん、生物学的な知識や科学的知識をどの程度有しているのかは、各個人によって異なる。しかしながら、「今日のデザートは果物よ」と言われて「レモン」が出てくるよりは、いちごやメロンなどの方が喜ばれるのではないだろうか。そして、このようなイメージが元になり、類似性が見出され言語化されるのである。例えば、レモンは蜂蜜漬けにしたら甘くて美味しいだとか、紅茶に入れると美味しいと思われるかもしれないが、裏を返すとレモン単体だけでは満足感を得られないとも言える。このことから、“This smartphone is a real lemon.”で「このスマホ、マジで欠陥商品」のような解釈を可能にする。

私たちの言語表現には限界があるとも言えるが、このようなメタファーによりさまざまな表現が生み出され無限とも言える広がりを見せる。ジョージ・レイコフの有名な著作名である *Metaphors We Live By* が端的に言い当てているように、メタファーなくして言語生活を送れないのである。そしてそのメタファーによる言語化は、主観的・経験的なイメージを元にしており、それらが意識されることは少ない。そのため、日常的な言葉遣いや歌詞などに、たくさんのメタファーが潜んでいる。少なくとも言語研究者のような立場ではない限り、わざわざ日常的な言葉遣いや歌詞を言語学的見地から考察・検証されることは稀

であろう。

言葉／言語表現が先なのか、あるいはそれを言語化する上で思考が先なのか、については本稿では問わない。もちろん一方的に影響を与えるものであると言うつもりはないが、とはいえ互いが無関係であるとも言えない。また、思考において思っていない事柄であっても、日常的に接することでそれが思考へ影響を与える可能性を否定することもできない。以上から、“plant”の原義に従い、「植物」というものがどのような思考／思想を植え付ける可能性を有するのかを、日常的な言語表現や歌詞を通して考察することが本稿の狙いの 1 つである。同時に、本稿で取り上げるような身近な言葉に潜む「ものの見方」の異同は学習者の英語（学習）への興味を惹くとともに、より豊かな言語表現の獲得につながり得ることも示唆したい。ただし、筆者は「国際英語論」の立場から英語教育のあり方を構築する立場にある（仲 2002, 柴田・仲・藤原 2020 など）。そのため、本稿で取り上げる英語表現については、聞いたり読んだりする際に理解できれば良いが、自ら話したり書いたりする技能の獲得までは想定していないことをあらかじめお断りしておく。

3. 植物のイメージと言語表現

植物は、主として花／草／木／果物／野菜に分類できる。上述したように、分類法そのものに問題がないわけではないが、本稿でより重視しているのは人々の日常性である。そこでは、主観的・経験的なイメージが優先されるのであった。本稿では、一般的な植物の分類法に従い、それぞれの言語表現を見ていく。

3.1 花

花は、日常生活や歌詞の中で用いられることが非常に多い。主観的／経験的なイメージは最終的には各個人によって異なるが、日本語と英語の言語表現を比べると、両言語間である程度の差異が確認できる。例えば、日本語で生活を送っている私たちの多くは、「桜」を見ることで「春」を感じることが多いだろう。それに対し、英語では“snowdrop（スノードロップ）”を見て春を感じる者もいる。

「花」のイメージといえば、華やかであることや、蕾から開花することを楽しむことなどが連想されやすいのではないだろうか。そこから、次のような事例がある（なお、各事例については特に断り書きのない限り、Google 検索で見つけられるものを採用した。というのも、本稿では人々の日常性を重視しており、インターネット上に「普通に」見かけることのできる表現として捉えているためである）。

(1) Beautiful and smart, she has always been the flower of society.
（彼女は美しく、頭もよく、いつも社交界の花形だ）

（牧野・岡 2017：250-251）

(2) He’s a real late bloomer, isn’t he?（彼は本当に遅咲きだよね）
(3) His talent finally bloomed.（彼の才能がついに開花した）

結婚式のブーケには、愛の象徴である「バラ」はもちろんだが、“gypsophila（かすみ草）”もよく用いられる。花言葉（language of flower）は「永遠の愛」である。このかすみ草は、小さな白い花であるが、そこから“Baby’s breath”という別名がある。例えば、“Can you make a bouquet with a baby’s breath?”（ブーケにかすみ草を入れてくれますか？）のように使われる。

他方で“I love you”を花言葉とするバラは、その本数によって異なる意味を持つとされる。例えば 1 本のバラだと“love at first sight”（一目惚れ）であり、11 本の花束にすれば“beloved”（最愛）になる。ここまでくれば「1」のゾロ目でいきたいところだが、「100%の愛（100% of love）」は 100 本になるのが興味深い。

Bette Midler の *The Rose* は、映画『The Rose 』の主題歌で、Billboard（米国の音楽チャート誌）で 1 位を獲得している。彼女は同曲で、グラミー賞最優秀女性ポップ・ヴォーカル・パフォーマンス部門も受賞している。この曲を日本語でカバーしたのは、都はるみであり、邦題は『愛は花、君はその種子』である。同曲は、1991 年公開のジブリ長編アニメ映画『おもひでぽろぽろ』の主題歌に採用されている。日本語歌詞では、原曲と「花」に関して異なる点がある。以下は該当箇所の原曲歌詞、その日本語訳、およびカバー曲の歌詞の一部である。

原曲（The Rose）	日本語訳	カバー曲（愛は花、君はその種子）
Just remember in the winter	ちょっと思い出して　冬には	思い出してごらん　冬
Far beneath the bitter snows	厳しい雪のずっと下で	雪に　埋もれていても
Lies the seed that with the sun's love	じっと耐えている種が　太陽の愛で	種子は春　おひさまの
In the spring becomes the rose	春にバラとなって咲くことを	愛で　花ひらく

表 1.『The Rose』と『愛は花、君はその種子』の歌詞比較

もちろん、曲に合わせて歌詞の工夫がなされるため細かな違いは多々見られる。ここで注目したいのは、表中の最後の部分である。原曲では“the rose”とされている部分がカバー曲では「花」とされている。寒い冬の時期を越え、春の暖かな日差しにより開花するのは、原曲ではバラであるのに対し、日本語のカバー曲では「花」全般として描写されている。スノードロップではなくバラを持ち出すことで、聞き手に「愛」を連想させる狙いがあるかもしれない。

3.2 草

「草」は、英語では“grass”だが、“green”や“grow”と同じく“ghre-”を語源とする。青々としていて、放置しているとすぐに増殖し庭一面が雑草だらけになったりする。根は地中に張り巡らされ、なかなか根絶やしにできない。実際、“grass roots/grassroots”で「草の根」と表現され、例えば、“Gifu city has been assisting grassroots-level international exchange.”（岐阜市はもう何年も草の根レベルで国際交流を支援している）のような使われ方をする。

日本語と英語で少し違うこともある。日本語で「草の根を分けても捜す」と言うが、英語では“leave no stone unturned”がそれに対応する表現だろう。日本語では「草の根を分けて」捜すものが、英語では草の周辺にあるだろう「石」を 1 つ残らずひっくり返すという点で異なる。

ところで、SNS などでは「(^ω^)www」や「草生える」などの表現を見かける。「(笑）[warai]」の頭文字である“w”を 1 つ使うだけで、「(笑)」と同じ意味とするネット用語である。この“w”が「草が生えている」状態と見た目上似ていることから、「草生える」という表現が定着している。これに該当する英語は、おそらく「：-)lololol」であり、“lots of laugh”ないしは“laughing out loud”の略であるようだ。英語では草は生えないらしい。なお、絵文字の向きが日本語と英語で違う点も留意したい。

3.3 木

「木」は、空に向かって高く伸びる。その天辺まで木登りをすると見晴らしがよく気持ちいいだろう。ふと下を見ると、高さのあまりに怖くなったり、あるいは天辺であるゆえにそれ以上に逃げる場所もない。英語には、“up a tree”（苦しい立場で，追い詰められて）という表現や、“the top of the tree”（最高の地位；第一人者[主に英国]）などがある。他にも、“in the green tree”（元気な時に，繁栄の時代に）という表現もあり、ここでは“green”という青々しく成長するイメージと結びつく語も伴っている。

3.4 果物

「果物」も他の植物と同じくたくさんの種類がある。果実そのものという点では、「果実を実らせる」すなわち「実を結ぶ」＝「良い結果をもたらす」という表現がある。英語でも、“The business he started ten years ago finally bore fruit.”（彼が 10 年前に始めた事業はやっと実を結んだ）（牧野・岡 2017：70-71）という使われ方をする点で共通している。

先に、“lemon”が「欠陥のある」というイメージが言語化されていることを述べた。他の果物はどうだろうか。甘くて美味しい“peach”（モモ）は、“He is a real peach.”（彼は本当に素敵です）や、“You are a peach.”（君って最高）のような使われ方をする。“banana”（バナナ）はすぐに傷んだり、あるいは猿が熱狂的に振る舞うイメージがあるためであろうか、“I think I'll go

banana if my partner leaves me.”（妻にふられたら気が狂っちゃうだろうな）のような用例がある。

さて、「国際共通語としての英語」という観点からは、これらのような表現を使いこなす必要はないことになる。なぜなら、主観的／経験的なものに由来するイメージは文化によって異なる傾向が強く、それゆえ可能な限り文化的な色合いを排除し、互いにコミュニケーションの成立のための手段として英語を使おうとする立場においては、ここで挙げたような表現は「聞いてわかる」「読んでわかる」ことは求めても、わざわざ自分から話したり書いたりする上で用いる必然性はないからだ。それよりは、より文化的にニュートラルで、伝わりやすい表現を心がけることが求められる。例えば、それぞれ“The smartphone is faulty.”や、“He is really lovely.”、“I think I'll go crazy.”で伝わりやすくなるだろう。

ところで、バナナは、外側は黄色で内側は白色である。このことから、黄色人種でありながら、白人のような精神／思考になってしまうことを嘆いたアーティストがいる。シンガポールを代表するアーティストである Dick Lee は、*The Mad Chinaman* という曲を通じて、アイデンティティの揺らぎを表現している。その歌詞には、“Western feelings from my oriental heart / How am I to know, how should I react? / Defend with Asian pride?”とある。村野井（2006）が述べるように、「中国系シンガポール人である自分の言葉や外見の西洋化（アメリカ化）と自分の内なる東洋的なものがぶつかってアイデンティティが揺らぐ心情を表現」しており、「ネイティブ・スピーカーを目指して英語学習を推し進める先に、何が待っているかを暗示している」(同:179)と言えよう。日本でも「国際共通語としての英語」を目指す英語教育政策へと舵を切ったが、このような歌詞から考えさせられるものがある。

3.5 野菜

漫画家・鳥山明氏の作品の 1 つに『ドラゴンボール』シリーズがある。原作の連載は 1995 年に完結しているが、その後も『ドラゴンボール GT』や『ドラゴンボール超』（後者は現在も連載中）へと広がりを見せている。2022 年にも映画化され、世界各国で愛され続けている作品である。

さて、そのドラゴンボールの主人公は「サイヤ人」であるとされる。「サイヤ」は並べ替えると「ヤサイ」である。野菜を意味する“vegetable”は、ラテン語の“vegete”を語源としており、「活気のある、元気な」を意味する。主人公の孫悟空は、確かに活気があり、元気な描写をされることが多い。その孫悟空の「サイヤ人」としての名前は「カカロット」であり、これは“carrot”であろう。carrot の花言葉は「幼い夢」である。孫悟空（カカロット）は幼少期に生まれ故郷である惑星ベジータから地球に派遣された経緯があり、その頃の記憶を失ったものの、断片的に記憶を取り戻す描写がある（『ドラゴンボール超』、19 巻、82－84 話）。

「野菜」に話を戻そう。日本語で「飴と鞭、報酬と罰」を意味するのは、英語では“carrot and stick”となる。また、「瓜二つ、そっくり」は“two peas in a pod”となる。それぞれ馬に人参をちらつかせる一方でスティックで叩いて走らせたり、同じ莢の中にある豆を区別できない状態をもとにしている。こうした表現は日常生活だけではなく、“It's the carrot and stick?”（*Ransom - Say What You Did* より）や、“Two peas in a pod.”（*Norm of the North* より）など、映画やアニメ作品でも見られる。次節では具体的な野菜や果物をいくつか取り上げ、日常の娯楽に潜むそれらを用いた表現を見ていこう。

4. イメージは日常の娯楽に潜む

“A rose can never be a sunflower, and a sunflower can never be a rose. All flowers are beautiful in their own way, and that's like women too.”（バラはヒマワリになることはできず、ヒマワリはバラになることもありません。すべての女性がそうであるように、花もそれぞれが美しいのです。）

これは、モデルの Miranda Kerr の言葉である。愛や美の象徴として用いられるバラを引き合いに出し、ヒマワリの美しさを言い表すだけではなく、個々の花が互いに変換できないこと、それぞれが固有の美しさを有していることを伝えている。ここではバラとヒマワリといった花が挙げられているが、そのイメージからくる言語表現は私たちの日常の娯楽においてもしばしば見受けられる。

4.1 ヒマワリ

ヒマワリの花言葉は「あなただけを見つめる」や「愛慕、崇拝、あなたは素晴らしい」などである。なるほど、陽に向かっ

て大きく花を開き、眩しいほどの黄色い花々といったイメージがあるのだろう。

映画『スパイダーマン：スパイダーバース』（2018 年公開）は日本でも大ヒットした映画の１つだろう。そのサウンドトラックに、Post Malone and Swae Lee による *Sunflower* という曲がある。歌詞には、“Then you're left in the dust unless I struck by ya / You're the sunflower, I think your love would be too much”（君は打ちのめされてしまうんだ。俺がそばにいないと。君はヒマワリなんだ。君の愛は俺の手に余ると思う。）太陽のような眩しいほどの魅力は、時に大き過ぎるという感情も引き起こす。

4.2 オオムギ

広大な大地に、晴れ渡った秋空。その下に一面に広がる麦畑。清々しく、清らかなイメージである。“barley（オオムギ、大麦）”の花言葉は「清らかな愛情」だ。

日本でも大ヒットした Sixpence None The Richer の *Kiss Me*（1997 年）。その歌詞の冒頭では、次のような描写がある。

> Kiss me out of the bearded barley / Nightly, beside the green, green grass / Swing, swing, swing the spinning step / You'll wear those shoes and I will wear that dress
> （キスして　生い茂る麦畑から抜け出して /夜には　深緑の草原の傍で /ゆらゆらとステップを踏むの / あなたは青の靴を履いて / わたしはあのドレスに身を包むの）

“Kiss me”から始まる歌い出しのインパクトとは裏腹に、優しいメロディが特徴的なこの曲において、生い茂る麦畑（“bearded barley”）は歌詞全体を通して描かれる恋愛観を彩る表現である。清らかな情景が描かれることで、爽やかな印象を与える歌詞となっているのではないだろうか。

4.3 リンゴ

“apple of my eye”という表現がある。例えば、“My son is the apple of my eye.”で「息子は私の大切な存在だ」という使い方をする。アニメ『The Simpsons: Love Is a Many Splintered Thing』では、“She knows she's the apple of the corner of my eyes.”というセリフがある。

ところで、昨今話題の AI 翻訳や対話型 AI では、ここで挙げたような表現は「正しく」解釈されるだろうか。下の写真１は、先のアニメ作品中のセリフを DeepL で自動翻訳をした際のスクリーンショットで、写真２は同じく ChatGPT を用いた際のスクリーンショットである。

写真 1. DeepL

写真 2. ChatGPT

DeepL では、「彼女は、自分が私の目尻のリンゴであることを知っている」と訳し、ChatGPT では「彼女は私の目の隅の宝物であることを知っています」としている。ChatGPT の訳だとかろうじて意味をとれるものの、DeepL ではほぼ意味をなしていない。これらの検索結果は 2023 年 6 月 2 日のものであり、今後はより洗練されていく可能性はある。ただし、この検索

を行った時点では、メタファーのような表現はそれほど正確に理解できているわけではなさそうだ。文化に根ざした表現は、最新のテクノロジーであっても容易に理解するわけではないようだ。

4.4 根

「“root”（根）」といえば、地中に張り巡らされることから、物事が定着しているというイメージを生む。例えば、“Many European and American customs have taken root in Japan.”（欧米の習慣で日本に根付いたものはたくさんある）（牧野・岡 2017: 499）のように使われる。

あるいは、物事の要因が深いところにあり簡単には解決できない、というイメージへと広がる。根が深いことから、執念深く、しつこい、という意味も持つ。映画『Dumb and Dumber To』（2014 年）では、“That thing’s really taken root!”というセリフがある。また、“deep-rooted”は「根深い」という意味で、“The cause of their religious differences is deep-rooted and cannot be easily resolved.”（彼らの宗教的対立の原因は根深く、簡単に解決できるものではない）（同: 185）と言う。他にも、“pull ~ out by the roots”で「根こそぎにする」となり、“Gifu City launched a campaign to pull the problem out by the roots.”（岐阜市はその問題を根こそぎにすべくキャンペーンをはじめた）と言ったりする。このように、日本語・英語ともに「根」に対するイメージが共通している。

4.5 チェリー

“cherry-pick”という表現は、チェリーがたくさん実っている畑の中から、商品価値のあるものを選んで摘むことから、「選り好みをする、入念に選ぶ」という意味になる。例えば、“He’s always cherry-picking the best projects for himself.”で「彼は常に最高のプロジェクトだけを選り好みしている」である。この表現は日常的によく使われ、X（旧 Twitter）で“cherry pick”を検索すれば非常に多くの事例が見られる。The Movie Corpus（https://www.english-corpora.org/movies/）によると、“cherry-pick”は 6 件ヒットする。例えば、『Gifted』（2017 年 4 月全米公開、同年 11 月に日本公開）には“...court-appointed foster family, Frank. - Hey! Drop it! - We could cherry-pick... from the cream of the crop. Mutually approved. Just hear me out...”という台詞がある。

4.6 ポテト

オーストラリア出身の 5 人組バンド、Jakubi（ジャクビ）のヒット曲に *Couch Potato* がある。“couch（カウチ＝長いす、ソファー）” にゴロリと寝そべり、テレビばかり見ている人の姿はまるで potato(ジャガイモ)のようだ、ということから生まれた表現である。同曲の MV では、“Mr. Couch Potato just like her / He loves what she does / When she does what she loves / Now they got this feelin’ that this just might work”という歌詞とともに、ソファー上でダラダラと過ごす若者が描かれている。

5. おわりに

植物は私たちにとって非常に身近な存在である。そして、バラやヒマワリなどの花に対して、あるいは野菜や果物などに対して私たちはさまざまなイメージを抱いている。それらは生物学的な分類・認知によるのではなく、主観的・経験的なものなのであった。その主観的・経験的な意味づけにより、植物名を用いた表現が生み出されるのは自然なことだろう。比喩的に生み出される表現は、日常での会話や映画や音楽といった娯楽においても用いられる。日常的に用いられることでそのイメージが再生産され、消化されているのである。

本稿で取り上げた「植物」はごく一部である。日常会話や映画・音楽には、植物に関する表現がまだまだたくさんある。例えば、本稿では「花言葉（language of flower）」をほとんど取り上げなかった。花言葉にはそれぞれ特別な意味が込められているが、根拠がないわけではない。一例だけ挙げておこう。

Simon & Garfunkel は、イギリス民謡をベースに『Scarborough Fair』をヒットさせた。その歌詞には、“Are you going to Scarborough Fair?／Parsley, sage, rosemary and thyme /Remember me to one who lives there /For once she was a true love of mine.”とある。歌詞には、パセリ、セージ、ローズマリー、タイムなどの植物名が並ぶ。中世紀末のヨークシャー地方の行楽地であったスカボロウは、商人たちにとって重要な交易場所であった。英仏による百年戦争や内戦であるバラ戦争と百数十年もの長期戦争に明け暮れた時代において、徴兵は不可避であり、恋人との別れの悲しみを花言葉に込めたと言われている。パセリは消

化を助けたり苦味を消したりするだけではなく、中世の医者たちには霊的な意味としても捉えられていた。徴兵による突然の別れを夢であって欲しいとする願いが込められているのかもしれない。セージは耐久力の象徴とされており、恋人同士の別れの期間を耐えようという誓いが込められている。ローズマリーは愛、貞節を表し、英国や欧州では花嫁の髪に小枝を刺す風習もあることから、不滅の愛が込められている。そして、タイムは覚悟の象徴であり、出征を見送る覚悟なのであろう[(2)]。

ジョン・レノンは、“Love is the flower you've got to let grow.”（愛とはあなたが育てなければならない花のようなものだ）という言葉を残している。心の内を身近なものに喩えて、言葉に託すことは、言語を豊かに用い、理解する一助となろう。何より、英語学習者や英語教師が本稿で取り上げたような植物に関する比喩表現を契機として、日本語と英語の背景にある「見方・考え方」の異同に興味を抱き、英語学習／英語教育の幅を広げることを願ってやまない。

（2023 年 9 月 7 日受理）

(1) 伏屋（2011）は、岐阜大学の学生・大学院生の計 106 名（教育学部＝51 名、工学部＝31 名、応用生物学部＝17 名、地域科学部 7 名）を対象にアンケート調査を行った。質問のうちの 1 つに、「なぜ英語が好き／嫌いか」というものがある。このアンケート調査の結果によれば、「英語ができるから／できないから」という理由と同等に、「外国や外国の文化に興味がある／ないから」と回答する者が多い。「英語を使いこなす」という実用的な観点から英語を「好き／嫌い」になる学習者がいる反面、それと同程度に「外国や外国の文化への関心」という教養的な観点から英語を「好き／嫌い」になる学習者がいることを示している。そうであるならば、いわゆる 4 技能にのみ焦点を当てた「使える英語」教育のあり方は、学習者から英語学習を遠ざけてしまう危うさがある。本稿では、主として言語表現の背景にある文化を扱うが、学習者の英語学習への好奇心を喚起するのは、必ずしも「使える英語」だけではないことには留意したい。

(2) 岡倉綾子「「Scarborough Fair CANTICLE」の闇を追う」（https://utaten.com/specialArticle/index/4336）を参照。

【参考文献】

《英語文献》

Ibbotson, P. and M. Tomasello (2016) “Language in a New Key,” *Scientific American*. November 2016: 70-75.

Lakoff, G. and M. Johnson (2003) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.

Pinker, A. Steven. (2003) *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. Penguin.

《日本語文献》

エヴァンズ、ヴィヴィアン（2021）『言語は本能か－現代言語学の通説を検証する』開拓社.

加藤重広（2007）『ことばの科学』ひつじ書房.

柴田美紀・仲潔・藤原康弘（2020）『英語教育のための国際英語論－英語の多様性と国際共通語の視点から』、大修館書店.

トマセロ、マイケル（2008）『ことばをつくる－言語習得の認知言語学的アプローチ』慶應義塾大学出版会.

仲潔（2002）「英語教育は英語帝国主義にどう対処するか－英語教育の座標軸」森住衛（監修）・言語文化教育研究論集編集委員会（編）『言語文化教育学の可能性を求めて－言語文化教育研究論集』、pp.246-263. 三省堂.

———（2009）「言語観教育の展開」『社会言語学』（「社会言語学」刊行会）（9）、pp.113-138.

———（2011）「言語観を豊かにするコミュニケーション活動」『岐阜大学 教育学部研究報告 人文科学』、60 (1)、pp.103-124.

———（2012）「言語文化観を育成する「英語科教育法」の実践－言語文化観のゆさぶり」、森住衛（監修）・関西言語文化教育研究会研究論集編集委員会（編）『言語文化教育学の実践－言語文化観をいかに育むか』、pp.47-67. 金星堂.

———（2013）「ことばと文化の学び：〈いつか/ずっと役立つ言語文化論〉序論」『岐阜大学 教育学部研究報告 人文科学』、62(1)、pp.107-122.

———（2020）「ことばと文化の学び（3）－ 英単語の楽習」『岐阜大学 教育学部研究報告 人文科学』、68(2)、pp.101-109.

———（2022）「言語観を豊かにするコミュニケーション活動 (2)」『岐阜大学 教育学部研究報告 人文科学』、71(1)、pp.115-128.

伏屋美穂（2011）「英語教育における異文化理解－寛容な言語文化観育成のために」仲潔（編）『言語文化教育の諸側面』（岐阜大学教育学部卒業研究論文集）第 4 号：189-241.

牧野成一・岡まゆみ（2017）『日英共通 メタファー辞典』くろしお出版.
政村秀實・Paulus Pimomo（2018）『図解 英単語イメージ辞典』大修館書店.
村野井仁（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.
森住衛（2004）『単語の文化的意味－friend は「友だち」か』三省堂.
安井泉（2010）『ことばから文化へ－文化がことばの中で息を潜めている』開拓社.
山田雅重（2017）『日英ことわざ文化事典』丸善出版.
山田雅重（2019）『日英・慣用句の文化事典』丸善出版.